

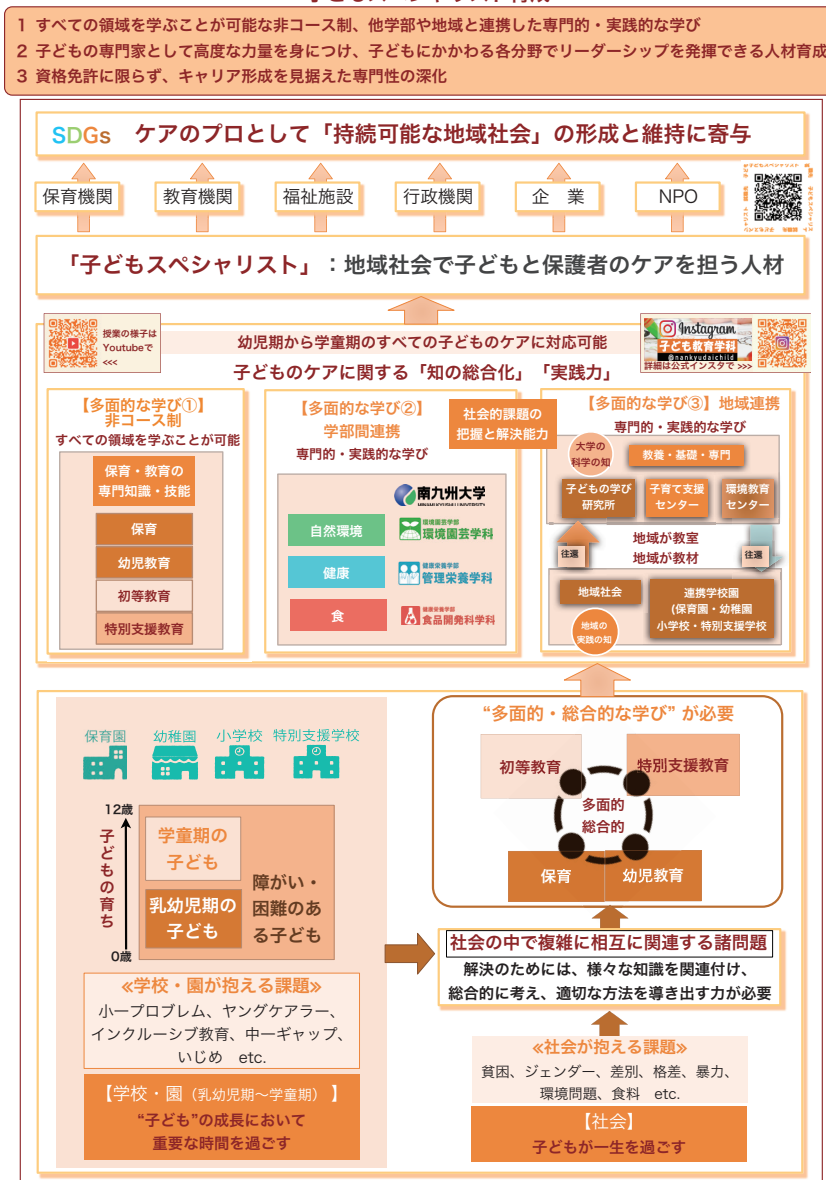
## 特集2：南九州大学・人間発達学部の「子どもスペシャリスト」育成

### 各研究室の専門性と学びのプロセス その2

貧困、ジェンダー、差別、格差、暴力、戦争、環境問題、食料問題など、複雑に総合に関連する諸課題が山積する現代社会。子ども達が乳幼児期から学童期までを過ごす学校・園でも、貧困、ヤングケアラー、いじめ、小一プロブレム、インクルーシブ教育、中一ギャップ、いじめ等、様々な課題を抱えており、指導者には子どもに関する幅広い知識・スキルに基づく「総合的な力」が、これまで以上に求められています。

南九州大学・人間発達学部・子ども教育学科では、2021年度より地域社会で子どもと保護者のケアを担うことができる人材を「子どもスペシャリスト」としてイメージ化し、スペシャリストへ至る4年間の多面的・総合的な学びを、特色あるバリアフリーな3つ学び（非コース制・学部間連携・地域連携）としてまとめました（図）。本号の特集では、2022年度より新たに赴任した2研究室の教員と2023年度4月に着任予定の3研究室の教員より、多面的・総合的な学びを支える専門性と各研究室の「子どもスペシャリスト」へ至るプロセスについて紹介します。

#### 「南九州大学 人間発達学部 子ども教育学科」 ～子どもスペシャリスト育成～



子ども教育学科の「子どもスペシャリスト」育成と多面的・総合的学び

## 「子どもスペシャリスト」～読・書・問の教育をとおして～

算数科教育研究室 河野 康男

算数教育／算数科カリキュラム

### 1 児童観・教育観の確立につながる教育を

現在、小学校の現場においては、教職員の大量退職時代を迎え、教職員の数的確保とともに、採用倍率の低下から教職員としての質の低下が危惧される状況にある。

これまで、公立の義務教育に36年間携わり新規採用者に関する中で、新規採用者が児童や保護者との信頼関係の構築に苦慮する場面や、拠り所となる自分なりの児童観や教育観が確立できておらず、一貫性の無い指導によって学級経営が破綻してしまう場面を目にすることが多くなってきた。

これらの状況は、新規採用者に対する研修や同僚、管理職による日常の指導だけでは解決できない大きな課題だと考えている。でき得るならば、大学等の教員養成課程にまで遡って学生自身が自分なりの物の見方や考え方を育て、彼ら／彼女らなりの児童観、教育観を確立させていくための指導が必要であると考え続けてきた。

以上のことから、私自身が教員養成課程のある大学に身を置き、指導者の一人として教員養成に関り、学生の夢の実現とともに教育界に貢献したいという考えから、本年度より本学での教員としてスタートを切るに至った。

### 2 「読・書・問」の教育

私は学生に対して「読・書・問」の三つの力の育成を教育の柱に据え実践を重ねていきたいと考えている。

「読」とは、単に文字や文章を読むということではなく、他から与えられた情報を正確に理解する能力を意味する。対象となる情報は、文章、音声言語によるもののほか、映像などの非言語情報も想定している。「書」とは、単に文字や文章が書けるということではなく、自分が他に伝えたいことを正確に自分ならではの表現で他人に伝えられる能力のことを意味する。「読」と同じく、その伝達の手段は、文章、音声言語によるもの他、映像などの非言語情報も想定している。「問」は、与えられた情報に対して問いを持つ能力を意味している。「それは本当に正しいのか」「何を根拠にしているのか」等の疑問をもち解決を図っていく能力を意味する。

以上、「読・書・問」の教育を基本とし、担当

領域である算数科等での学びを進め、日々情報が更新される中であっても、正しく読み、ただしく書き、正しく問う能力を備えた、次の時代を担う人材を育成したいと考えている。

### 3 必須科目「算数」での具体的な取組

小免必修科目「算数」(後期:14/15講「図形の面積を求める公式を作る」)での授業を例に、取組の一部を紹介する。

長方形の面積は、「たて×よこ」の公式で求めることができるが、なぜ皆が当たり前だと考えているはずの公式で長方形の面積が導けるのだろうか。当たり前を「問う」ことから、計測の原理に目を向けさせ、長方形の面積を求める公式をもとに、計測の原理と公式のもつ意味を再確認させ、三角形や平行四辺形の面積、さらには円の面積を求める公式を既習事項とのつながりから学生自身の力で導かせていった。

個人思考から集団思考へと思考の場を広げながら「主体的・対話的で深い学び」とはどのような学びであるのか、自分の気付きを自分の言葉でまとめ(「書」)伝え、また相手の気付きにも耳を傾ける(「読」)ことで理解を深めていく。これらの活動をとおして、前提を問うこと、算数科における既習事項を生かすことの重要性と、多面的に考えることの面白さなど、算数科のもつ楽しさを体感することを目標に、授業を行った。

これからも実践と研究を重ね、学生のみならず私自身にとっても「学ぶ」ことは「喜び」であるを感じながら、理想の教育を追求していきたい。

#### 【受講後の学生の感想から】

「算数」を受講し、もう一度、算数や数学を学び直したいと強く思う。これまで私は算数や数学に対して苦手意識があったが「なぜそのようになるのか」という視点を持つことで算数や数学が楽しいものになると考えることができた。児童の中には、私と同じように、苦手意識をもっている子が多くいると思う。理由の一つは、なぜそうなるのかプロセスを理解するのではなく、私がそうであったように解き方を学習しているからだと思う。私は、プロセスを重視する授業を行っていきたい。

## 「居心地よい学級づくり」を目指して

教育哲学研究室 後藤 吉道

小学校教育／発達心理学

学級担任にとって「学級づくりと授業づくりは車の両輪」と言われる。「学級づくり」と「授業づくり」を着実に実践できる力が必要とされるということである。

この両輪は、別々に働くものでなく、互いに補完し合うものである。例えば、学び合い高め合うことができる授業実践を進めていくには、つながりを大切に「学級づくり」が基盤となる。

「だれもが安心して過ごせる学級」「だれもが学び合える授業」を創造していくためには、望ましい人間関係の形成を図る力が学級担任に求められる。「質の高い教育をみんなに」提供するために、一人一人の個性や可能性を伸ばし、社会的な資質を育てる「居心地のよい学級づくり」を進めていきたい。

### 「仲間づくり」

「人間は、人間の中で育つ」と言われるように、人との関りによって、人として成長していく。

子どもは周囲との関わりをとおして成長していくことを考えると、「学級づくり」の意義はとても大きい。人との関わりを広げていく時期となる幼児期・児童期は、心身の成長とともに社会性を身に付けていく上で、きわめて重要な時期であり、園や学校は重要な場である。

そこで、「仲間づくり」のよさを日々の教育活動において具体的に理解させ、実践させ、身に付けさせていきたい。例えば、次のような内容が挙げられる。

- 人のことを知る
- 自分のことを伝える
- 助ける・助けられる
- 共感する
- 他人と自分とは異なるところを知る
- 協力してやり遂げる
- 衝突を解決する

このような仲間との体験を教師が見届け、称賛することによって、子どもは「仲間づくり」の大切さを味わうことができ、望ましい社会性を身に付けていく。

昨今、つながりの希薄さによる他者への不信感や敵意、孤独感、ストレスなどが、様々なトラブルや心の病につながっているという報告を目にす

る。「仲間づくり」は、「居心地よい学級づくり」とともに、将来に渡って、望ましい対人関係を築く力を身に付け、心身の健康にもつながっていく。

### 「あるがままの自分を受け容れる」

「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という言葉のように、「仲間づくり」の上で配慮したいのは、一人一人の子どもの居場所をつくり、「自分づくり」を大切にす視点である。

心地よいコミュニケーションの基となり、対人関係における理想的な姿勢がある。それは、「I am OK, You are OK」という姿勢である。これは、自分のことを受容でき、仲間も受容できるというものである。(Berne, E.1962)

豊かな人間関係を実現している人は、自分を受容できている人という。自分を受容するとは、簡単に言えば「あるがままの自分」をそのまま受け入れることができるということ。長所だけでなく欠点や弱点も含めて、それらを受け入れることができるということである。

ありのままの自分を受け入れることができる人は他者も受け入れることができる。

なぜなら、誰かと比べることなくありのまま自分「OK」、そして、同様に誰かと比較することなくありのまま他者も「OK」だからである。

多様性を前提としたこの考え方は、快い自己実現が可能となり、心地よい対人関係につながる。仲間との関係において自己肯定感をもたせ、「I am OK, You are OK」の姿勢でいると、コミュニケーションも心地よいものへと変わる。

笑顔で登校・満足して下校

そういう「居心地よい学級」を一人一人の子どもに味わわせることができる「子どもスペシャリスト」の輩出を目指したい。

### 引用文献

Berne, E. (1962). Classification of positions. Transactional Analysis Bulletin,1,23.

## 子どもの自発行動を促すモノづくりのスペシャリストをめざす

福岡女学院大学人間関係学部 山之内 幹  
特別支援教育 / 教育実践学

### そもそもの はじめは銀の ハンドベルかな

2009年12月10日、特別支援学校の音楽室で児童が♪たきびを合奏していた。楽器はハンドベルである。児童にとってハンドベルを鳴らすことは教師の予想以上に困難であった。手指の麻痺のためハンドベルをうまく握れない子、低緊張のためハンドベルを落としてしまう子もいた。どのようなハンドベルなら児童がうまく握り、自ら振って音を楽しむことができるだろうか。教師の開発が始まった。

初めに作ったのは百均の鉄の輪で作ったリングハンドベル。柄が細く、子どもが握り感を味わえないということで却下。次はアルミニウムハンドベル。何度も曲げたり伸ばしたりすると折れてしまう。3番目はホースハンドベル。演奏中に芯のアルミニウム線がホースから飛び出してくる。最後に辿り着いたのがフリーハンドベル。ホース内にシリコンを流し込み、芯を固定してある。麻痺のある子も柄を自在に曲げて持ちやすいように形を変えることができる。またシリコンが流し込んであるので握り感も味わえる。さらにベルの部分をガチャガチャのケースに入れ、様々な音源をケース内に入れ、いろいろな音を楽しむことができるようになった。

### ハンドベルからオルゴールへ

2020年秋、肢体不自由児教育論の講義の後、研究室に戻る。講義で「重度の子にストレッチをした時、BGMでオル



ゴールの曲を流したら子どもたちの緊張がスッと解けた」という話をした。研究室の本棚に掛けて

あるフリーハンドベルがふと目に留まる。(あのガチャガチャのケースにオルゴールは入らないか)と閃く。そして生まれたのがポケットオルゴールである。

オルゴール本体がガチャガチャのケースで被われているので落としても壊れにくい。ケースがプラスチックなので消毒しやすい。下カプセルをはめると音が小さくなり、入院している子どもたちも病室で聴くことができる。病院内の療育活動や特別支援学校の訪問教育の授業でも活用できる。ポケットに入れて歩きながら音を楽しむことができるので、ポケットオルゴールと命名した。



### 山之内ゼミの取り組み

コロナ禍で人との出会いが制限され、少なくなっている障害の重い子たちへポケットオルゴールを贈る活動を始めて3年が経った。これまでの寄贈施設数は88、製作個数は568である。今後も、多くの子どもたちが思わず振り向きたくくなるような、パッと手を伸ばしたりしたくなるようなモノを学生とともに考案し、製作していきたい。

私はモノづくりの過程で、子どもの姿を思い浮かべ(ああでもない、こうでもない)と試行錯誤し続けられる子どもスペシャリストを育てたい。

(2023年4月より南九州大学人間発達学部 / 特別支援教育研究室)



## インクルーシブな学校を支える「子どもスペシャリスト」

鹿児島市教育委員会 川田 耕太郎

特別支援教育／インクルーシブ教育システム

### 1. 共生社会の実現に向けて

2014年の文部科学省の中央教育審議会初等中等教育分科の会報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」から、10年目を迎えました。この報告で目指していることは、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる共生社会の形成」です。そして、その社会を実現するにはインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、そのシステムを構築するために特別支援教育を推進していきましょう、と示されています。

また、インクルーシブ教育システムについては、障害者の権利条約第24条において、「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」であり、「同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要である。」としています。つまり、障害の有無に関わらず、全ての子どもが共に学ぶことを目指しつつ、教育的ニーズに応じる必要な教育も行うことのできる、多様で柔軟な仕組みが保障されることになっています。

### 2. 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告を踏まえて

文部科学省は今後の特別支援教育を発展させるために、引き続き2014年の報告を重視するこ

とにしています。この10年近くで、学校や家庭、地域等において特別支援教育に対する理解が進んできました。各自治体は、就学教育相談のシステムを構築し、適切な指導と必要な支援を行う多様な学びの場の整理を進め、各学校では適切な指導と必要な支援を行うようになってきました。しかし、まだ、十分ではと言えない状況です。全ての学校の通常の学級に、教育上、特別な支援を必要とする児童生徒が多数在籍していることが分かっています。特定の教師が特別支援教育を担うのではなく、全ての教師が特別支援教育に関する専門性の向上が必要だと言われています。現状としては、必ずしも通常の学級での特別支援教育が十分に行われているとは言えない状況であり、共に学び、共に生活するインクルーシブな学校の実現には、まだ努力が必要な状況のようです。

### 3. ゼミでの取組について

特別支援教育についての専門性は、「特別なもの」と認識されやすい状況です。しかし、その専門性は特別支援学級や通級指導教室だけでなく、通常の学級の児童生徒の教育に通じるものです。子どもの多様な実態を理解し、分かりやすい授業を行うことや一人一人への配慮など、子どもたちが安心して学び生活できる環境をつくることは、全ての学級で大切なことです。本研究室では、障害の特性や困難さのある子どもの理解、ユニバーサルデザイン、合理的配慮などの学びを通して、多様性を理解し、他者との関わりやインクルーシブな学校のために必要なことは何かを学びます。子どもたちの教育的ニーズに応え、適切な指導と必要な支援を行いつつ、障害の有無に関わらず、多様な子どもたちが共に学び、共に生活することを支えることのできる「子どもスペシャリスト」を目指していきます。

(2023年4月より南九州大学人間発達学部／特別支援教育研究室)

## 子どもスペシャリスト育成のための取り組み

第一幼児教育短期大学 幼児教育科 西田 雅美  
保育学

本学子ども教育学科の掲げる『子どもスペシャリスト』育成について、日頃講義で注視しながら行っていることを記載します。

研究領域は保育学であり、講義内容は保育士や幼稚園教諭、保育教諭などの保育者養成に関する科目を担当しています。日々の講義においては、常に、保育所保育指針の総則にも示されている、保育士の資質として必要なこととして『倫理観に裏付けられた専門的知識、技術、及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行う』ことと、教育基本法の第11条に示されている、『幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである』ことを常に基本に置きながら実施しているところです。と同時に、子どもとかわる上で最も重要視していることは、各年齢別の発達段階を把握することであり、このことが全ての基本になると考えています。特に、低年齢に向かって月例の短さに反して発達の速度は速く、0歳から1歳までの一年間には身体や言語に急激な発達が見られ、2歳、3歳と次第に緩やかな発達を見せていきます。そのような中で、発達には個人差があり、子ども一人ひとりに対応しなければならないことと考えています。

子どもを理解するためには、先に述べた発達段階を把握することに加え、一緒に子ども達とかわる(遊ぶ)ことだと考えています。子ども達に近づくための方法として、手遊び、指遊び、身体を使った遊び、絵本・紙芝居の読み聞かせ、折り紙などを使った制作活動などがありますが、日々、保育現場で行われている保育技術の一部を、講義にも取り入れています。これは、上手下手、出来不出来を問うものではなく、経験を積む機会と実習に向けての自信をつけるためと捉えています。実践を積むことにより、自信につながり、ボラン

ティア活動や実習に活かすことも可能であると考えています。

保育とは「子どもの保育」と「保護者に対する指導」を行うこととされ、「子どもの保育」とは養護と教育を一体的に行うことであり、「保護者」とは、在園児の保護者のみならず、地域において在宅で子育てをしている家庭への支援を行うことも含まれています。よって、家庭の形が多様化してきている今日、保護者や地域と連携しながら、それぞれのニーズに対応できるよう、必要とされる知識や技術を身に付けられるようにしていきたいと考えています。

子育て支援における実践の場としては、附属子育て支援センターの取り組みの一環として行われている子育てひろば「みなみん」の活動にも積極的に参加し、地域の子育て家庭への支援や、学生が子ども達や保護者の方々とのかわりの中から学びを得ることが出来るように努めていきたいと考えています。

(2023年4月より南九州大学人間発達学部 / 幼児教育研究室)